

翻訳 「長崎原爆の青い目の語り部」<sup>1</sup>

— ポール コブレットのインタビュー —

**The Paul Couvret Story**

**Survivor of a Japanese POW Camp and Nagasaki A-Bomb**

クリス フリン

**Chris Flynn**

**【要 約】**

**[Abstract]**

In 1999 Paul Couvret visited Fukuoka as a member of the international exchange group “The Friendship Force”. The group from Australia was made up of couples in their 40s and 50s, so the single Couvret aged in his 70s, and his experience as a Prisoner of War in Nagasaki was unusual for the group, let alone an Australian visiting Japan. An interview with Couvret was conducted by the author and the interview was broadcast in Northern Kyushu (LOVE FM) over four weeks in 1999. The following translation is an attempt to bring the unique war and hibakusha experiences of Couvret to the non-English speaking Japanese community.

平成 11 年に「フレンドシップフォース」という国際交流団体の一員としてポール コブレット氏はオーストラリアから福岡を訪れた。その団体は主に 40・50 代の夫婦で構成されていたが、70 代のコブレット氏は異例な存在だった。彼は日本帝国軍の捕虜と長崎原爆の被爆の経験を持ちながら訪日したオーストラリア人だったのだ。当翻訳の筆者は本人のインタビューを録音し、その話は 1999 年に九州北部のラジオ (LOVE FM) で 4 週間に渡って放送された。この翻訳は英語が堪能ではない日本人にコブレット氏の戦時中、被爆、そして戦後の体験を伝えるための取り組みである。

**キーワード:** 原爆, 捕虜, 語り部, 被爆者

**(Key words:** Atomic Bomb, Prisoner of War, WW2 storyteller, hibakusha)

**インタビュー**

私はオランダ人<sup>2</sup>で、戦争が始まる前は、東インド諸島<sup>3</sup>に住んでいました。戦争が始まって、オランダ海軍航空隊に入隊しました。パイロット

になりたかったからです。ジャワ島が日本軍に占領される直前、飛行訓練生は貨物船に乗って、オーストラリアへ撤退するはずだったのですが、フリーマンテルから 2 日間航海したところで、日本海軍に捕らえられました。セレベスのマカッサ

ルで数カ月過ごした後、1942年10月に軍艦あさま丸で長崎へ移送され、終戦まで長崎で過ごしました。

最初は、日本海軍のもとで捕虜になったのですが、海軍の兵隊さんはフレンドリーでいい人たちでした。でも、マカッサルに到着して日本陸軍に引き渡されると、状況は一変しました。陸軍の扱いは海軍とは全く違っていた…。残酷で、機会を見つけては私たち捕虜をひどくぶったり、殴ったりしました。本当に違っていました。陸軍の兵隊は「捕虜を苦しめろ」という教えを受けていたんですね。

**そのあと長崎へ送られたわけですが、長崎のどこに着いたのですか？<sup>4</sup>**

軍艦が長崎の港に到着し、そこで船を降りたあとフェリーに乗り換えて香焼島へ送られました。香焼島にはカワミナミ造船場があり、1万トンの貨物船が作られていました。

**そこで働いていたのですか？**

ええ、毎日。20日間連続で働いて、1日の休み。休みの日に洋服を洗ったり、破れたところを直したりしました。

**仕事の日課は何ですか？**

軍を先頭に兵舎から造船場まで行進させられて、着いたら造船場の管理者に引き渡されました。捕虜は皆チームに分けられ、日本人の労働者と一緒に働きました。ひとチームは5、6、7、8人で、半分は日本人、半分は捕虜でした。チームのボスはいつも日本人でした。ボスがいい人だったらそれほど悪くはありませんでしたが、怒りっぽいボスに当たれば、ひどい目にあわされました。ぶつ、殴るなどの暴行は日常茶飯事でした。

日本の軍人たちは私たち捕虜に向かって、「お前らは降服したからクズだ、価値のない人間だ」

と繰り返し言いました。両手を上げるジェスチャーをしながら、「お前らは降服したんだ。」とね。でも仕方がなかった。私は海のまん中で捕われて、どうすることもできなかった……。一部の軍人たちは…、彼らの扱いは…、つまるところ日本の軍人は私たちに優しくすることはできなかったんです。捕虜に親切にすれば、同僚が上に報告して罰を受けることになるので、みんな捕虜につらくあたっていました。でも一緒に働いた日本人の中にはいい人もいて、その人たちとは仲良く協力して働きました。

**ことばは通じましたか、または通訳か英語やオランダ語を話せるひとはいましたか？**

いや、日本語だけでした。もし分からなければ顔に平手打ちやパンチが飛んできました。おかげで日本語の基礎を早く覚えました！

**日本語の命令やことばを覚えていますか？**

もちろん！悪いことばでしょう、いつも叫んでいましたが、放送禁止用語かもしれませんのでもしそうでしたら後で編集して下さい……。などです。これ貴様、バカヤロ、さぼってさぼって！<sup>5</sup>

一日の食料は小さな缶詰め3個でした。朝昼晩、長方形の小さな缶に入ったトマトソース漬けのニンジン。なにしろ三食そればかりでした。それに米としぼりかすの混ざったものもありました。しぼりかすは牛の飼料でしたが、本当にまずかった。実はこの飼料はタンパク質や栄養分がお米より豊富でよかったかもしれないのですが。

とにかくみんな栄養失調がちで、特にビタミンBとビタミンCが不足していました。

**戦争が長期化するにつれて日本は苦戦しているという兆候はありましたか？**

はい、もちろん。トイレットペーパーなど手に入りませんでしたから、日本兵は新聞紙を使って

いましたが、あまった新聞紙をトイレに置いたままにしていました。新聞には絵や地図が載っていました。地図に大戦の勝利や追撃した軍艦や戦闘機の数や場所が詳しく記載されていました。私たちは大太平洋の地理に詳しくなかったので、戦地はよく分かりました。最初はパプアニューギニア、次はガダルカナル、北上してグアムとサイパン、硫黄島、そして沖縄。連合軍が近付いてきているということを察知していました。

そしてついに数多くのB29爆撃機が長崎の上空に見られるようになったのです。

長崎原爆が投下された日は、爆心地から6キロ離れた香焼島で働いていました。原爆の光を見て、その直後爆風を受け、ビルが倒壊しました。そのときドックの底にいましたが、外へ防空壕へ逃げている途中空を見上げた時、巨大なきのこ雲を目の当たりにして、この火山の噴火のようなものは一体なんだろうと、目を疑いました。

その晩、収容所に戻って捕虜同士で「あの兵器は何だったのだろう」という話をしました。当日外で働いていた捕虜は、一機の爆撃機が投下した、三つのパラシュートが付いた原爆を目撃していました。私たちは、爆撃機がそれと一緒にいくつかの焼夷弾(しょういだん)を投下し、地下の弾薬の備蓄室の通気坑に焼夷弾が入りこんで弾薬に引火し、連鎖的にすべての弾薬が爆発したために、町が破壊したのだと推定しました。

たったひとつの爆弾にそんな破壊力があるとは夢には思いませんでしたから。

**原爆についていつ分かったんですか。8月15日まで捕虜でしたか？**

はい、15日まで捕虜でした。原爆のことは全く知りませんでした。15日すぎ仲間の何人かが香焼島から長崎市内に行った時、町はなにもかもめちゃくちゃで、燃え果てた風景を見てびっくりした、という話を聞かされました。私たちは大規

模な火事でもあったのかと思いました。なにしろ長崎市は壊滅状態で、1/3は原爆に破壊され、残りの2/3は火の海に飲み込まれていたからです。長崎市の被害は大火事のためだと思いました。

そして、8月28日になって初めてそれが「アトミックボンブ」<sup>6</sup>というものだったということを知りました。その日3機のアメリカのミッチェルB25爆撃機が捕虜収容所の上空を飛んでいたの、私たちは毛布をまるめて、広場にN-E-W-S?という文字に並べました。するとその中の1機がフォーメーションから離れてぐるっとUターンをして収容所を低飛行し、窓からたばこの箱を落としました。そのチェスタフィールドのたばこの箱の中に手書きのノートが入っていてこう書いてありました：

「アメリカが爆弾を投下  
戦争は終わった  
国に帰りなさい」

その時はじめて原爆のことを知ったのです。放射能について何も知らなかったの、何人もの捕虜が食料を探すために山手の方へ出かけていたのですが、爆心地を通ったために致命的な放射線を浴びてしまいました。

**ということは、終戦と降服については知らなかった？**

いいえ、知っていました。15日でしたよ。その日ちょっと意外なことに、私たちは仕事に行きませんでした。なんでだろうと不思議に思いました。すると福岡第2捕虜収容所の司令官が壇上に上がり、捕虜全員に向かって、

「日本帝国軍とアメリカの軍司令官との対話により戦争行為を中止することを決めた」と発表しました。彼はそういう言い方をしました。

**戦争に負けたとは認めなかったのですか？**

いいえ、実際はアメリカが求めていた無条件降服でしたが、そういう話は出ませんでした。でも、無条件かどうかはどうでもいいことでした。突然自由になったということに気付いて、大の男たちが、涙を流しながら抱き合った光景は忘れられません。

原爆投下から54年経ちますが、もちろん被爆体験によって大きく人生が変わったと思いますが、54年を振り返ってみて、長崎、日本、または日本人はCOUVRETさんにとってどういう存在ですか？

少しずつ、日本人に対する気持ちが変わりましたが、もっとも大きな転換は1993年に訪れました。その年、長崎、広島市長、広岡市長と元島市長にお招きいただいて、「世界の市長の平和の集い」<sup>7</sup>に参加することとなり、それぞれの都市で5分ほどのスピーチを頼まれました。その時に、いろんな方とお会いしましたが、その中でももっとも劇的だったのは、長崎での市長歓迎会での出会いでした。ある新聞記者が私にひとりの日本人女性を紹介したのです。その女性は、私に「私は造船場で学徒動員として働いていました」と言いました。

私たち捕虜にとっては、学徒動員は敵の子供でしたが、それでも、造船場で重労働をさせられている小さな子供たちを見て、かわいそうに思っていました。彼女は続けてこう言いました。「捕虜の方々が、どんなにひどい生活を強いられているか、よくわかっていました。悪条件の中、ぼろぼろの服を着て、天気の悪い日も重労働をさせられているのを見て、ずっと罪悪感を感じていました。今日やっと謝る機会に恵まれました。申し訳ないことをしました、すみません、すみません」そう言って、彼女は深々と頭を下げました。

それは、私の人生にとって、非常に重要な瞬間でした。この言葉によって、残っていたわずかの恨みはどこかへ消えていきました。彼女にしても、「すみません」という一言で、50年間も心に持ち続けた罪悪感を消すことができたのです。私には

それがわかりました。

それから彼女は、ちょっと待ってください、と、いって席をはずしました。まあ、日本人だから、おみやげかちょっとしたプレゼントでも持ってくるのだらうと思っていると、彼女はなんととも意外なものを手にして戻ってきました。

彼女が持って来たのは、小さなお盆のうえにのったフルーツでした。桃が2つにメロンが二切れ、それにりんごとパイナップルがやはり二切れ。そして彼女はこう言ったのです。

「捕虜の方は、食べるものがほとんどなく、いつもおなかをひどく空かせていたことはわかっていました。

私の母は、いつもたっぷり多めのお弁当をつくってくれました。食べ切れなかった分をわけてあげたかったけれど、こわくてできなかった。そんなことをして見張りにでも見つかったら、ひどく殴られるとわかっていたから。

でも、やっとうこうしてあなたと同じものを分け合って食べられる日がきたのですね。」<sup>8</sup>

あの時の感動は一生わすれません。

最後になりましたが、一言いわせていただきたいと思います。

どこへ行ってもこのメッセージを伝えていきます。

恨みを忘れ、自分の心に平和な気持ちを抱き、周りの人ともその平和を享有することです。そうすることで世界に平和は訪れるのです。そしてこれが平和への唯一の道です。戦争から世界を救う唯一の手段です。

もし再びあのような戦争が始まり、核兵器が使われたら、まちがいなく文明は滅びます。長崎の原爆がこのことを教えてくれたのです。

## 〔翻訳者の注釈〕

---

<sup>1</sup> 「長崎原爆の青い目の語り部」というタイトルは翻訳ではない。なお、日本語には「語り部」というと戦争体験を伝える人という意味があるが、英語にはそれにあたる表現はないので、タイトルの日本語と英語の意味は多少ずれがある。

インタビューは英語で行われたが、放送は日本のラジオ局で放送するというので、先に日本語のタイトルが決められ、番組の宣伝や新聞の紹介に使われた。

<sup>2</sup> コブレット氏はオランダ生まれ、ジャワ島育ちで、戦後オーストラリアへ移住し、オーストラリアの国籍を取得したので、二重国籍である。

<sup>3</sup> 東インド諸島は現在インドネシアである。

<sup>4</sup> 斜字フォントは聞き手（翻訳者）の言葉を示す。

<sup>5</sup> この部分はインタビューのなかでは日本語でした。コブレット氏は意味は多少わかったが、汚い言葉に聞こえたので、放送禁止用語であると心配していた。しかし結局本人が思ったほど汚い言葉ではなかった。

<sup>6</sup> 当時本人は原爆の存在は理解していないので「アトミックボンブ」をカタカナ表記にした。

<sup>7</sup> 当時、コブレット氏はシドニーのワリンガー市の市長で1993年に広島市と長崎市を訪れた。当日のやりとりは西日本新聞が取材し、その写真を1999年7月23日の放送番組の紹介記事「豪人<sup>元</sup>捕虜が語る被爆」に載せた。

<sup>8</sup> 第三者の話を引用したのでそれを示すために太字・括弧をかけた。

